

福岡教区今年度の目標…「信仰の伝達」
小教区今年度のテーマ…「学び、伝えよう、家庭から私たちの信仰を」

次の世代に伝えること (No2)



主任司祭 遠山満

「あなたの逃げ場、安全地帯は、どこですか？」と問われたら、皆さんは何と答えられるでしょうか。多くの方は、家族と答えるかもしれません。ある人達は、友人。ある人達にとっては、サークルの仲間と一緒にいる時が、安心、安全を感じる事のできる時なのかもしれません。また、子どもにとっては、母親の懐が、安全地帯だと思います。か弱い子供が安心して成長していくためには、母親の存在が不可欠です。しかし、成長するに伴い、私たちは母親の懐から巣立っていきます。

結婚する時、自分の伴侶を母親のように考えている男性がいるようです。「このような男性は妻を母親の代理と考えており、自分も赤ちゃんのように絶え間なく世話をしてもらいたいという子供っぽい性質を残しています。一中略—このような人は、自分でも意識しないうちに相手を自分の利己的な欲求を満たす為に利用しています。このように結婚生活を誤ると、利用された相手は人間的に駄目になるか、慢性的な心身症である偏頭痛や気管支喘息等に悩まされるようになります」(『夢を育む結婚』クリスタ・メベス著)。それゆえ、私たちは誰かを母親の代理のように考えて、その人を避難所とするわけにもいかないのです。

それでは、私たちは、誰を、何処を避難所にすれば良いのでしょうか。聖書の詩編の「嘆きの詩編」と言われるジャンルの詩編の中には、主なる神が避難所であることが幾度となく語られています。嘆きの詩編の中には、イスラエルの王であったダビデの祈りもあります。ダビデは、先代の王であったサウルから命を狙われることが度々ありました。そのような状況の中で「主よ、私の力よ、私はあなたを慕う。主は私の岩、砦、逃げ場、私の神、大岩、避け所、私の盾、救いの角、砦の塔」(詩編 18: 2~3 節)と祈ったのです。

皆さんが、一週間に一度、ミサにいらして祈られることに敬意を表します。と同時に、私達が、詩編作者のように祈れるようになる為には、一週間に一度だけの祈りでは足りません。毎日の祈りが大切です。毎日の祈りを大切にしながら、私達は神様を逃げ場としていしましょう。そして次の世代に、神様こそが私達の逃げ場であることを、身を持って示していましょう。



カトリック笹丘教会 拡大信者会議事録

開催日時：2015年11月1日（日）11：30～12：30

開催場所：信徒会館

司会：川原

書記：牧山

始めの祈り—主の祈り

1. 連絡網について

電話連絡希望者の名簿を班長さんに渡した。

FAX希望者は教会事務のFAXに登録した。

メール希望者に対しては、本日付けのお知らせに案内を掲載しているが、もう少し分かりやすくして再度お知らせする予定。

2. 今後の予定

11/3（火）召命の集い 笹丘教会からはカレーと綿菓子を出店する。これに合わせかまどを購入した。たくさんの方の参加を。

11/6（金）アンナ・ヨアキム会

11/23（月）教区の日 小教区活動報告書を提出した。現在の参加希望者は大人13名、子供2名。今後も参加を呼び掛けていく。

11/29（日）大掃除 クリスマス飾り付け

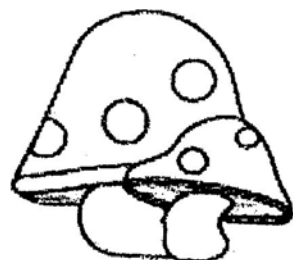
3. 新しいミサ典礼書の総則に基づく変更箇所について


待者向けの説明を11/8（日）に行う予定。会衆向けには11/15（日）ミサの中のお知らせで10分程度かけて行う予定。開始は11/29（日）待降節第1主日より。

4. その他

新しい倉庫に棚が設置されました。

終わりの祈り—アヴェ・マリアの祈り



}}}} 召命の集い 2015. 11. 3 (火) 

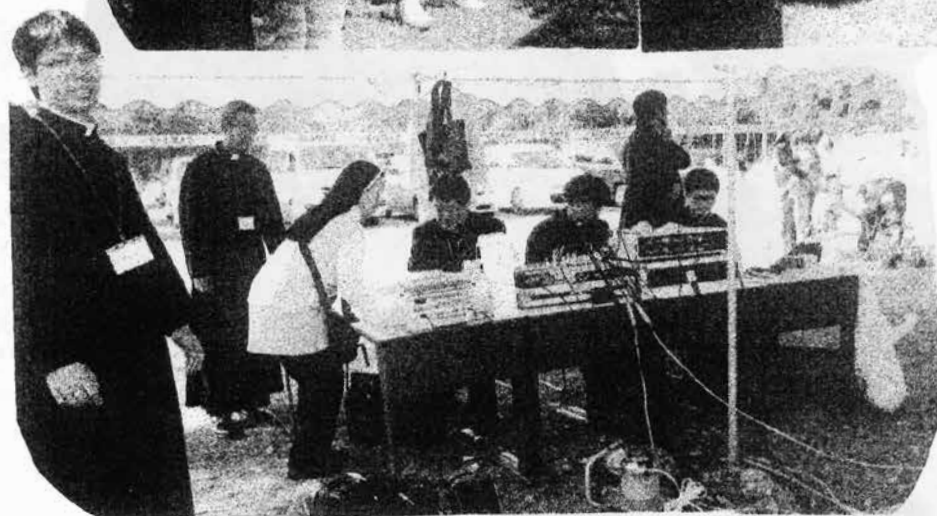
日本カトリック神学院福岡キャンパスにて

真っ青な空の下で開催されました。笹丘教会のカレーと綿菓子は大好評でした。
広大な敷地では、各教会で座るスペースが確保されそれぞれの教会の、のぼりが掲げてあり
ました。そこでは、シスターと神父様の着衣の紹介がファッションショー形式で行われていました。





神父様のカズラのクイズ。「この色のカズラはどの時に着用されるのでしょうか？」の答えを神学生が女装して寸劇を熟演していました。ラファエル神学生はピンク系のカズラを着ていました。お笑い芸人のはやりのコントを取り入れて、子どもたちを沸かせました。音響担当の神学生も真剣でした。丘の上では子どもたちが草スキーを楽しんでいました。





信仰のルーツコーナー



私は中学、高校とカトリック校で学びました。当時、道徳と宗教の時間があり12才で初めてキリスト教を知りました。

唯一の神様がいらっしゃる、神様が人間となられご自分を現し教えられた。それがイエス・キリストです。全ての出来事に偶然はありません。全て神様のみ手の中で関わり合い神様へと導かれる。そのための出来事です。そして神様は愛そのものです。

私は引きつけられ、その学びの時間が楽しみでした。シスター方の姿にもあこがれと尊敬をいただきました。あの裾の長い黒の服装はステキでした。特に印象深く覚えていることは、一人の男の先生が授業中であっても十二時の鐘の音が聞えると必ず全員起立して「お告げの祈り」を捧げたことです。生徒のほとんどは信者ではありませんでしたが、皆祈りのことばを覚えていました。そして、ある時、一人のシスターから『洗礼を受けませんか』と声をかけられました、それは驚きでした。その時どう感じたのか、どう思ったのか、はっきりと思い出せませんが何か特別な、とても大事なことだという事、そして「はい！受けます」と心の中で決めたように思います。我家は根っからの仏教徒で毎朝、父が神棚と仏壇に水をあげ、手を合わせ、お正月は三社参り、盆の行事、法事等ごく一般的な信仰生活で私も自然にそれに習っていました。そんな中、私は両親に受洗の意を伝えました。それは14才の私にとって大変勇気のいる事でした。父は偉大で恐い存在でもありましたが、学校で尊敬する人は誰ですか？の質問に迷わず『両親です』と答える程、尊敬もしていました。父に受洗許可を願い出て数日後、本家の伯父がやって来ました。父と伯父は数時間、受洗をやめるよう私を説得しました。私は只只、涙を流してその場に座っていました。恐くもあり何を言えばよいかも分からず、でも心の中の決心は揺るぎませんでした。最後に父は『一年間待ちなさい、一年後気持ちが変わらなければ、日本は信仰の自由を与えている国ですから、お父さんも許しましょう』と答えをもらいました。そして一年後15年間という間、一度も親に逆らったことのない娘が親族の中で唯一人キリスト信者になりました。それはもう50年前のことです。そして父も亡くなる前、受洗の恵みをいただきました。

神様のはからいは、いつくしみ深く、不思議に満ちています。感謝。



編集後記

今年もはや11月、死者の月を迎えた。

「いじめを苦に自殺…」過去に何度も聞いたこの言葉をつい先日も新聞で報じていた。教師だけでなく家族もいじめに気づけなかったという。

半年ほど前から学校司書として小中学校の図書室で子どもたちに接している。2学期が始まってすぐだったか、授業が終わり先生や友達が教室に戻った後もなかなか帰らない子どもがいた。「あそこは自分のいるところじゃない。家じゃないから」と言う。「そうだよね、家は夕方帰るとこだよ」と言うと、「家も家じゃない」と。この子がどんな家庭環境なのかはわからない。施設から通う子どもも数名いるというからもしかしたらそうだったのかもしれない。ほっとできる居場所がないのだとしたら毎日どんなに苦しいことだろう。言葉がみつからなかったが「またおいでね」と小さくなる背中に声をかけ見送った。

同じ頃、「死ぬほどつらい子は学校を休んで図書館へおいで」というある図書館司書の言葉が話題になった。このような考え方は図書館の専門家たちによって世界的にも議論されていて、さまざまなストレスを抱える現代人にとっての家庭、職場（子どもにとっては学校）に続く第三の場所、「サードプレイス」に期待が寄せられている。

図書館だけでなく教会もそんな「サードプレイス」として、人々、特に弱き者や小さき者たちに開かれた場所であればいいと切に思う。 (S. A.)